

研究課題：メタ解析による大規模縦断研究を前提とした新しい疫学研究戦略
— 口腔状態と精神機能との関連解明に向けて —

研究者名：服部佳功¹⁾、大井孝¹⁾、市川哲雄²⁾、池邊一典³⁾、佐藤裕二⁴⁾、成田紀之⁵⁾、笛木賢治⁶⁾、鈴木哲也⁷⁾、豊下祥史⁸⁾、田中昌博⁹⁾、石上友彦¹⁰⁾、村田比呂司¹¹⁾、古谷野潔¹²⁾、高津匡樹¹³⁾、川崎真依子¹⁴⁾、塚崎弘明¹⁵⁾

所属：¹⁾ 東北大・加齢歯科学、²⁾ 徳島大・口腔顎顔面補綴学、³⁾ 大阪大・附属病院咀嚼補綴科、⁴⁾ 昭和大・高齢者歯科学、⁵⁾ 日大松戸・顎咬合機能治療学、⁶⁾ 東京医歯大・部分床義歯補綴学、⁷⁾ 岩手医大・有床義歯補綴学、⁸⁾ 北医療大・咬合再建補綴学、⁹⁾ 大歯大・有歯補綴咬合学、¹⁰⁾ 日大・歯科補綴学Ⅱ、¹¹⁾ 長崎大・歯科補綴学、¹²⁾ 九州大・インプラント・義歯補綴学、¹³⁾ 日大・歯科補綴学Ⅰ、¹⁴⁾ 新潟大・生体歯科補綴学、¹⁵⁾ 昭和大・歯科補綴学

高齢者の保有歯数と精神認知機能の関連や、咀嚼による脳機能の賦活を示唆する知見は少なくないが、科学的根拠は脆弱で、未だ国民の健康保障の確たる基盤をなすには至らない。日本補綴歯科学会は口腔と脳機能の関連解明を目的に、複数研究領域のグループがネットワークを構築する大規模プロジェクト研究を始動し、一部として保有歯数や咬合支持状態と精神機能の因果関係を検討する多施設共同大規模前向きコホート研究を企画した。多領域の研究者が共同運営するコホートでの実施が現実的だが、学会主導で中央登録方式の多施設共同コホート研究を行うには困難が多い。そこで各施設がそれぞれのコホートで独自調査を実施し、成績をメタ解析する方法を設定した。この方式には各施設が独自調査分のプライバシーを確保できる利点がある。本研究は上述コホート研究のフィージビリティ・スタディに位置づけられ、新規な研究方式の成立可能性の検討と、メタ解析に向け全施設が共通に採用する評価項目ならびに任意項目の策定に目的を置いた。

学会ウェブサイトにて10施設を公募し、13大学15講座・分野等の応募を得た。全施設を採用し、共通評価項目を年齢、性別、健全歯数、処置歯数、う蝕歯数、残根歯数、現在歯数、欠損補綴歯数、未補綴歯数、欠損歯数、咬合接触部位数、アイヒナーの分類、ミニメンタルステート検査、高血圧既往歴、降圧剤服用の有無、脳血管疾患既往歴、喫煙歴と定めた。また国立精研識認知症スクリーニングテスト、Zung自己記入式抑うつ尺度、OHIP、OIDP、GOHAI、糖尿病既往歴、高脂血症既往歴、学歴、配偶者の有無、主観的健康感、過去1年間の歯科受診の有無、定期受診の有無、主観的咀嚼能力値を任意項目に設定した。

また研究期間内に6研究施設が8集団、計754名を対象に調査を実施し、重大な問題を認めなかったことから、本方式による研究の実施可能性が示された。一方、評価項目に加えて対象者の選択基準、除外基準なども必要の範囲で共通化することが、信頼性向上の観点から必要であることも判明した。